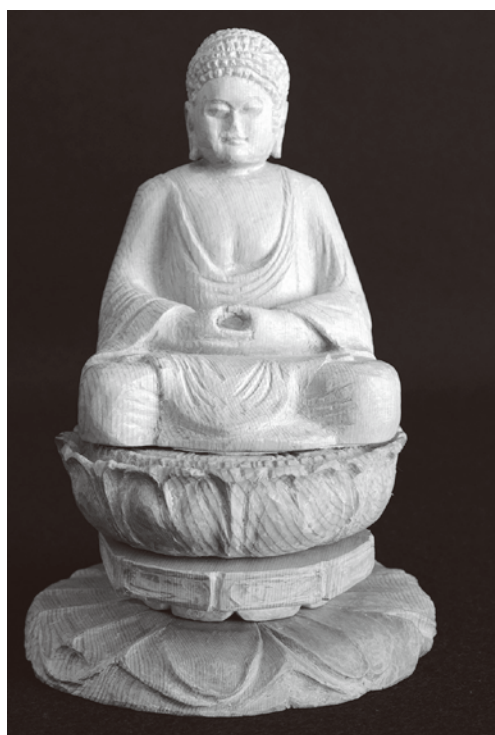


評

論



「釈迦如来座像」 中野 英敏

郷土・山武(玉の浦)の源流を辿る(その2)

成東 金田 弘之

伝承 古老が「昔、日本武尊率^{やましけるのみこと}いる船団が武射田に上陸したつつよ。地底から黒雲がモクモク湧き上がる凄い日だったつつよ：それでなヤマトタケルの家来が武射田に住み着いたつつよ」と、とつとつと述べたのが印象的であった。

また、ある民俗史家は「日本武尊が率いる船団(軍勢)が高富に上陸して多くの成人男子を虐殺した。そのため長いこと高富の住民は生活がなりたなくなり大変難渋した。」と述べ、衝撃が走った。

このほか郷土には日本武尊伝承が多く残されているが、歴史学者や考古学者はこのことについては深く言及しない。日本武尊は実在しない人物と決めつけているからであろう。

しかし、日本書紀・景行天皇四〇年条『竹の水門(玉の浦・中央部)』現九十九里・木戸川周辺』の記述内容を、郷土の地勢・伝承・遺跡・遺物などと対比・分析すると古墳時代前期(三八〇年頃)のリアルな姿が蘇ってくる。地勢(地形・地名) インベ(斎部)氏が上陸してから五〇年以上の歳月が流れていたとみられる『玉の浦』。

景観に変化はなくラグーン(湖沼や湿地帯)が延々とひろがっていた。

成東(鳴涛)浪切不動)、早尾(早帆)船が速く進む)、富口(白波が富む)、島などは当時の海流現象を彷彿とさせ、さらに武射田・高富・木刀・殿台・嶋戸・板付・和田(麻綿)・姫島などは日本武尊の軍事行動と関わりの深い地名・伝承として継承されている。

日本書紀 景行天皇四〇年条には、玉の浦を渡ってきた日本武尊の軍勢が『竹の水門』を攻略する場面を次のように記述する。

「蝦夷^{えみし}の賊首^{ひそのかみ}(首領)、島津神、国津神等『竹の水門』に屯^いみて距^{ふせ}がむとしき。然^{しか}はあれどもはるかに御船をみてその威勢を恐れて、心の内に勝つまじきことを知り、ことごとくに弓矢を捨て：裾を上げて海に入り王船を援^{たす}けて岸に着け自ら縛^{なす}って罪に復した：」と記している。

ここにいる蝦夷の賊首は、郷土の先人・インベ氏を指している。

『竹の水門』は、竹^{たけ}田^た越^{こえ}、水門^{みなと}港^{みなと}と解釈でき『田越の港』で、近傍を流れる木戸川の木戸は柵門^{とりで}(砦)の意味がある。

これに関連した高富伝承では、「日本武尊軍が上陸し多くの成人男子を虐殺した」という(高富にはインベ氏

が上陸していた)。

高富に隣接する木刀(地名)^{きがたな}は、日本武尊軍の鉄製武器に対抗して木製の棒(木刀)で戦って敗れた地名の名残であろう。

蝦夷の賊首は、田越の山上から二キロ離れた高富の惨状(敗北)を遠望し恐れをなして降伏したものと解される。紀は「…仰ぎて君の容を視るに人倫にすぐれ給えり若しくは神か…王は応えて吾は現人神の子なり…日本武尊はその罪を許し首領を虜にし従者として仕えさせた…」と記している。

これに関連して早尾神社記は「日本武尊この地に臨まる。故に神として祀る」と記しているが、『臨む』とは治者が被治者を治める意味がある。

首領(インベ氏)は捕虜になったわけで、滅ぼされたわけではなく、大和政権のもとで活動を許されていた(のちに造営された板付・駄ノ塚方墳はインベ氏の関与が認められる)。

埴輪群と服属儀礼 木戸川(竹の水門)上流の姫塚古墳(六世紀後半)から、四四体の埴輪群が堀に正対する状態で、また一体が周溝の外側から埴輪群に正対しひざまずく状態で、さらにもう一体が殿塚古墳の周溝の中から泳ぐ状態で出土した。

埴輪群の中央で『胡座する男』は相手を威圧する日本武尊、そして『ひざまずく男』は烏帽子をかぶり髪は角髪に編んだ神官で降伏した蝦夷の首領(国津神・インベ氏)、『泳ぐ男』は漁師風で「王船を引き揚げた人物(島津神)」とみられる。

古墳を王船に、周溝を海に見立て、埴輪群を配置することにより、景行天皇四〇年条(日本書紀)に記された情景をリアルに表現した『服属儀礼』であろう(埴輪は芝山仁王尊・埴輪博物館保存)。

日本武尊が身罷った後、父・景行天皇が安房国を巡幸し『淡の水門』^{あわみど}でとった『服属儀礼』を、日本武尊はすでに郷土『竹の水門』で執行していたのである。

武射臣^{むさののおみ} 境川中流の台地(島戸)で発掘された嶋戸境一号墳は周溝幅五m直径二〇m程度の小型の円墳である。

四世紀後半の遺跡から仿製鏡四面や玉類が多数出土し、日本武尊が東征した時期(三八〇年頃)とも重なり因果関係が認められる。

のち(七世紀終末)に、島戸・真行寺地区に巨大郡衙(古代政庁)が出現するが、嶋戸境一号墳を破壊せず(回避して)建設しており、貴人の墓として丁重に扱ったことが認められる。

古墳時代、郷土は武射(社)国と呼ばれ、皇統・彦忍

人命に始まる武射臣（武射国造）が統治したとされる。

武射神社の祭神は彦忍人命で、「日本武尊の家来が住み着いた」とする伝承を尊重すれば、彦忍人命は日本武尊の東征時、皇族將軍として参軍した人物で郷土にとどまり統治したとみられる。

早尾神社記は「第一三代・成務天皇の御宇、国造・彦忍人命を合祀、武射の総社となる」と記している。

事実、成務天皇の時代に制定された先代旧事本記・国造本紀には、彦忍人命を『国造』に任命と記され年代的にも矛盾はない。

房総では一一か所に及ぶ国造のうち位の高い臣性は三か所のみで、武射臣は中央（大和）から重要視されていた。しかしインベ氏との共存もあり、彦忍人命は皇統とは言え強い権力は行使せず、墓の造営も小規模にしたのではない。

のちに郡衙が古墳を回避して建設されている事実を踏まえて考察すれば、仿製鏡が出土した嶋戸境一号墳の被葬者は、皇族將軍たる武射臣・彦忍人命であったと考えたい。

巨大古墳 六世紀後半以降、武射国に大型の古墳が造営されるようになるが、上総国町誌は大堤権現塚古墳について、「この地（大堤）人工をもって築くところが始

めなりし」と記す。

六世紀終末に造営された権現塚古墳は『田越』に隣接する『大堤』にあり、盾形三重の周豪（外堀）を有し兆域（墓の領域）は一七四mにおよぶ巨大な前方後円墳で、房総では内裏塚に次ぐ規模を誇る。

日本武尊の東征からすでに二〇〇年余りの歳月が流れてはいるが、依然として皇統・彦忍人命の末裔・武射臣が統治していたとされる。権現塚古墳は武射臣の奥津城とみられている。

また、七世紀前半に造営された板付・駄ノ塚古墳は一辺が六〇mの巨大な方墳で、蘇我氏系の方墳と規模がほぼ同一である。

井上氏（元・城西大学教授）は「インベ氏は大化前、蘇我氏と結び神官として勢力をふるった」と述べるが、郷土でもインベ氏は武射臣のもとで重要な役割を担っていたものとみられる。

森台・北野遺跡五号墳や印旛・岩屋古墳にみる方墳はインベ氏が関与（造営）したとみられ、駄ノ塚古墳も同様であろう。

当時（五八〇～六二〇年頃）全国でも有数の巨大古墳を造営した武射臣は、なぜ大きな勢力を保持することができたのであろうか。

蝦夷攻略 六世紀前半、磐井の反乱（五二七年）や辛亥の変（五三一年）が起り、大和政権では大伴氏に代わって蘇我氏が登場し、中央集権的な色彩を強めていった。県史は「武射臣は蘇我氏（稲目・馬子の代）と同族関係を結んだ：（武射国は）蘇我氏の東国経営の拠点：」と論評している。ちなみに、蘇我氏の本貫は牟佐（奈良）で郷土の武射と同音である。

ところで武射国を中心とした古墳や住居跡から、東北系・二円窓鍔付直刀や土師器杯が出土しているのは、蝦夷（仙台周辺）との交流を示すもので、「武射国が蝦夷攻略の重要拠点（前進基地）になっていた」ことが認められる。

紀（敏達一〇年）は「辺境で数千の蝦夷が騒動を起こした（五八一年）：蝦夷の首魁・綾糟らが都に護送され：忠誠を誓い許された」と記しているが、武射臣（国造）らが鎮圧し、捕虜（綾糟等）を都に護送、蘇我氏を通じて天皇に助命を嘆願したものであろう。

大堤（木戸川流域）や真行寺（境川流域）の港・船に関する伝承は、武射臣が水軍（基地）を保有・管理したことを示している。

名取川河口付近（宮城県）をかつて『玉の浦』と呼称したというが、武射臣やインベ氏が蝦夷を攻略した際、

水軍基地に『玉の浦』を命名したのであろう。

時代は下るが続日本紀（七六九年）は「陸奥国・牡鹿郡の春日部奥麻呂が武射臣を賜った」と記すが、武射国から牡鹿郡（宮城）に移住していた春日部氏が大きな勢力を有していたことを示している。

この頃（六世紀後半～八世紀後半）、中央（大和政権）では、武射国を蝦夷攻略の前進基地として重視していたことが伺われる。

民俗史の意義 考古学者の故・森浩一先生は、「遺跡の発掘などで郷土の歴史が新たに発見されることにより人々に勇気を与える：」と述べている。

郷土の歴史を無関心または過去のものとして見過ごしてしまつと、ロマンも勇気も感じることはできない。

伝統・文化は、先祖から子孫へのバトンタッチにより過去から未来へ連綿と継承される民俗史（貴重な遺伝子）である。

先人の想い（生きた命の証）を発見し、そこに郷土（先祖）の活動を確認することが出来れば、未来に向かって生きる勇気をもたらすことができる。それが民俗史と考える。

(参考文献・資料)

- ・ 『房総の神話伝承から見た古代日本の謎』 国書刊行会
- ・ 『房総そして玉浦（武射）をつくった一族』 崙書房
- ・ 「竹の水門と武射国」 季刊邪馬台国 87号 梓書院

芭蕉と重なる加賀乙彦氏の詩魂

—— 加賀乙彦著『わたしの芭蕉』

埴谷 大掛 史子

芭蕉句は井本農一、堀信夫注解の『松尾芭蕉全発句』（小学館）で愛読してはいたが、地元句会の一員となり、指導者の勧めで読み始め、たちまち惹き込まれたのが、加賀乙彦著『わたしの芭蕉』（講談社二〇二〇年二刷）だった。精神科医で作家の加賀乙彦氏（一九二九～二〇二三年）は、その豊饒な創作業績と深甚な人格が多くの人に敬愛され、惜しまれて九三年の天寿を全うした。

『わたしの芭蕉』は書き下ろしで二〇二〇年一月に一刷が出た。既に加賀氏は精神科医の傍ら数々の小説を世に問い、谷崎潤一郎賞（『帰らざる夏』一九七三年）、日本文学大賞（『宣告』一九七九年）、大佛次郎賞（『湿原』一九八六年）、文部大臣賞（『永遠の都』一九九八年）、毎日出版文化賞（『雲の都』二〇一二年）など優れた執筆活動で多彩な受賞歴を持つ大作家だった。深く生と死に向き合い、人間の存在と魂魄（こんぱく）に迫真する表現による優れた文学を多く残した作家が、豊かな人生の最後に、さりげなく、笑みと共に置いていってくれたかけがえのない宝物、それが本著だ。

『わたしの芭蕉』というタイトルからも伺えるように、本著は、芭蕉句の注解や解説、評文ではない。著者が熱愛する芭蕉に寄りそい、芭蕉の歩んだ道を芭蕉の魂と共に共感し、嘆息し、首肯（しゅこん）しながら、飄々と歩み、いつしか芭蕉の中に入りこんで著者が芭蕉その人と化してしまふのを見るかのような書物である。芭蕉句の厳しい推敲の苦悶の跡もわが事として述べられるので、読者には芭蕉句の成立の過程がドラマを観ているように伝わる。

第一部俳句の文体 3 閑寂と孤独の項を本文を借りつつ見てみよう。

日本橋小田原町で大勢の弟子に俳句を教える生活から、江東深川の芭蕉庵に移り、貧しく閑寂な世界に環境を一変させた芭蕉、句境も死に向かつて一步を踏み出すように富貴贅沢や賑わいを捨て、蕉風という独自の境地を拓く。本文を借りつつ芭蕉の苦吟の跡をたどる。

初めて深川の冬を詠んだ秀句

櫓の声波^ううって陽氷^{はらわた}夜やなみだ

は初句では

櫓の声にはらはた氷るよやなみだ

だったが、「櫓の声」「はらはた」の漢字とひらがなが表現を殺しあつて弱いので両者に均衡をもたらす表現に変える。

櫓の声や腸氷る夜はなみだ

櫓の音と痛いほどの寒さが、漢字によって表現されて釣り合っている。が、このような均衡のとれた表現では満足できないのが芭蕉、表現がなめらかになっただけ平凡になった。

そこで漢字を増やして表現をさらに強くする。

櫓声波をうって腸氷る夜は涙

漢詩調で漢字と漢字が喧嘩している。喧嘩の分だけ、表現が弱くなってしまう。櫓声は昼間ののんびりした櫓の音まで含み、表現が拡散した。ではどうするか。

櫓声波を打てはらわた氷る夜や涙

また「はらわた」にしてみる。まだ櫓声が弱い。思い切って「櫓の声」という擬人語にすると人間の肉体に近い。カタカナのヲルを使うことで凍る寒さと波をうつ船頭の強い動きを示し、それを聞いている自分自身の寒さを拮抗させた。聴覚がとらえた音と皮膚が感じた寒さを船頭のそれに変え、船頭と芭蕉自身が一体になった瞬間を見事に捕らえた。たった二文字のカタカナが櫓の音と腸氷る寒気との均衡と分離をもたらし、推敲の末到達した秀句である。

本書は芭蕉の厳しい句作の過程をドラマのように生ま生ましく見せる。

本書はまた莊子を敬愛し、その影響を受けた生き方を貫いた芭蕉を句と共に浮き彫りにする。寛文一二年（一六七二）江戸に下った二九歳の芭蕉は談林派の俳諧師宗匠として名をあげるが、心中満たされず、三七歳江戸深川の芭蕉庵に移り、弟子は取らず貧乏暮しに入る。名声も富も求めず貧しく暮らしているとほんとうに芭蕉を尊敬する人々が訪ねてきて、米、味噌、酒などを届けてくれるようになる。欲を捨て一心に俳諧の道に励む芭蕉を人々は尊敬し、蕉風という新しい俳諧の世界がひらけた。そして芭蕉は四一歳のとき『野ざらし紀行』の旅に出る。本書では次のように語られる。

〈野ざらしを心に風のしむ身かな この句は旅に出るにあたって「野晒し」すなわち髑髏どくろになってもかまわぬという強い意志を述べている。ここには芭蕉が敬愛した莊子の影響がみられる。『莊子』によれば髑髏は死者の世界の絶対自由の象徴であった。秋風が心に沁みこむというほどの強いものという莊子の言葉を大事にしているところが「風のしむ」によって表現されている。〉

本書で、著者は「芭蕉は美しい日本語の世界に遊ぶ樂しみを私に教えてくれた」と述懐する。芭蕉の俳文、俳句を例示し、寄りそいつつ独自の鑑賞眼で芭蕉の内心の動きや句の成立のさまを語り、その語りがまた芭蕉の俳

文俳句に引けを取らぬ日本語の美しさに満ち、こんなにもすばらしい理解者、詩魂の伝達者を得た芭蕉の歓びが伝わってくるようだ。

芭蕉最晩年の「旅と病と終焉」の章では、もはや筆執る力なく病み伏しつつ、冴え冴えと澄み渡る句境の名句が連なり、最終句は弟子支考の口述筆記により認められたと述べる。

いなづまや闇の方行五位の声（文月）

名月に麓の霧や田のくもり（八月一五日）

ぴいと啼尻声悲し夜の鹿（九月八日）

菊の香や奈良には古き仏達（九月九日）

此道や行人なしに秋の暮（九月二五日）

比秋は何で年よる雲に鳥（九月二六日）

秋深き隣は何をする人ぞ（九月二八日）

旅に病で夢は枯野をかけ廻る（一〇月八日深更）

元禄七年（一六九四）一〇月一二日芭蕉逝去。享年五

〇歳。遺言により義仲寺に埋葬される。

芭蕉と同時代の俳句宗匠は多く、それぞれあまたの弟子を抱え、豊かに暮らし、弟子もとらず貧窮の日々に甘んじている芭蕉を変わり者よと冷笑していたが、誰一人として後世に名を残した宗匠はいない。芭蕉のみ一人屹立した高みで三〇〇年言葉の牽引者となり、減びること

のない言語表現の開拓者でありつづけるのだ。

〈参考文献〉

加賀乙彦著『わたしの芭蕉』（講談社）

井本農一、堀信夫注解『松尾芭蕉全発句』（小学館）

青木周蔵とその妻エリザベート

千葉市（元下布田） 田野 圭子

はじめに

令和の即位の礼で皇后雅子様が着用した豪華なティアラはまだ記憶に新しい。現代もなお大変豪華でその美しさに圧倒されるが、このティアラは一三〇年も前に明治政府がドイツに注文して作らせたものである。当時、日本の国際的な地位の向上を急務としていた明治政府が、国の威信をかけ巨費を投じて発注したものである。明治一十九年、東洋の新興国日本が高価なティアラを外国に発注するにあたっては、青木周蔵夫人エリザベートの尽力があったといわれている。青木は伊藤博文内閣の下で条約改正のために活躍し、のちに外務大臣となった人物である。エリザベートはドイツ貴族令嬢という出自を活かしてティアラの発注を大いに助けたが、エリザベートの貢献はあまり知られていない。

本稿ではティアラを通して近代日本の歴史の一端を垣間見るとともに、日独文化の架け橋となって日本の地位向上に貢献した青木夫妻について、そのアウトラインを紹介したいと思う。

プロイセン気質の外交官・青木周蔵

青木周蔵は一八四四年三月三日（天保一五年一月十五日）、長州藩の村医・三浦玄仲と妻・友子の長男として長門国厚狭郡生田村（のち山口県山陽小野田市）に生まれた。二二歳の時に、日本で初めて種痘を行った蘭学者・青木周弼の弟・青木研蔵の養子となり士族となった。この際二人の名を取り周蔵と改名し、研蔵の娘・テルと結婚する。二五歳の時のドイツ留学に際し、テルが同行を拒んだため周蔵は単身渡欧。ドイツ滞在中の三〇歳のときベルリンでドイツ貴族の令嬢・エリザベート・フォン・ラーデと知り合い結婚を決意する。

二人の結婚への道のりは宗教、国籍、家柄など様々な理由から障害の多いものだったが、それに加え、周蔵は日本に妻・テルがいる既婚者であった。テルは家付き娘であったため、青木家から離婚の承諾を得られず、エリザベートとの結婚は難航した。しかし周蔵は太政大臣三条実美に嘆願の手紙を出すなどし、また同郷の木戸孝允や品川弥二郎の骨折りもあつて、一八七七年（明治一〇）四月二〇日、ドイツ・ブレーメンの教会において桂太郎（当時駐独陸軍武官、後の首相）を結婚立会人として結婚式を挙げた。周蔵三三歳、エリザベートは二八歳であった。

周蔵はベルリンで国体、立法、権力分立などを学び、その知識を明治憲法の起草、銀行業、税制、保険業の構想に活かした。また、それまで留学生を主として米国、英国、フランスなどの各国に送って来た日本政府に対し、ドイツ留学の重要性を説いた。一八八九年（明治二二）、青木は外務大臣に就任。その後、駐独公使・駐英公使兼任となった。一八九四年（明治二七）、駐英公使として外相の陸奥宗光とともに条約改正に尽力、アレクサンダー・フォン・シーボルト（シーボルトの長男）を通訳として日英通商航海条約に調印して不平等な領事裁判権の撤廃に成功した。一八八七年（明治二〇）五月九日、勲功により子爵に叙される。ドイツ滞在二〇数年のドイツ通で「ドイツ人のような日本人」と言われ、ドイツ文化を日本に紹介した。

その代表例が栃木県那須に開いた青木農場と那須別邸（国重要文化財、旧青木家那須別邸）である。那須野ヶ原には一八八一年（明治一四）以降、ヨーロッパ貴族に憧れる華族により一九もの農場が創設されたが、青木の農場も明治一四年に開設、農場主の別邸として一八八八年（明治二一）、ベルリン留学時代の友人松ヶ崎萬長の設計により西洋風の邸宅が建てられた。青木はこの瀟洒な別邸を本拠として農業試験を行い、また雇人の子供達

のために小学校を設立した。那須の他に中禅寺湖畔にも別荘を建築。現在、ここはフランス大使館の施設として使われている。残された多くの写真からは、当時、青木が要人・知人たちを招いて国際的な交流を行っていた事を窺い知ることができる。

名門貴族令嬢・エリザベート

青木の妻となったエリザベート・フォン・ラーデはドイツ・ボルメルン地方（後の東ドイツ・バルト海に面した地方）の名家の出身で、その祖先は一四世紀までさかのぼることができたという。周蔵と出会ったのは二五歳頃と推定されるが、詳しい経緯は不明である。一八七七年（明治一〇）四月二〇日、ドイツ・ブレーメンの教会で結婚式を挙げたとき、エリザベートは二八歳、周蔵は三三歳であった。

エリザベートは一八七九年（明治一二）八月二二日、周蔵の帰国に伴って来日、同年一月一六日には長女ハナを出産した。残された写真を見ると、エリザベートは大変美しい女性だったようである。貴族らしい豪華な衣装に身を包み、凛とした雰囲気伝わってくる。あの時代に日本人と結婚し単身来日したのだから、さぞ意志の強い女性であつたろうと推測されるが、周蔵が品川弥二

郎にあてた手紙には「この女性は非常に教養も高く、かわいらしく素敵な人で（中略）私はぞっこんほれ込んでいる」とあり、かわいらしい魅力をも備えた女性であつたらしい。ちなみに周蔵が那須野ヶ原に建てた別邸は、エリザベートのために建てられたともいわれる。

皇室の洋装化と国の威信をかけたティアラ

欧米と対等な国づくりを急いだ伊藤博文は、その一環として宮中の国際化に取り組み、皇后美子（昭憲皇太后）の洋装化を進めた。維新の翌年、一八六九年（明治二）七月に英国のエディンバラ侯爵を初の「国賓」として接遇した際、日本が国際儀礼に通じていなかったため英国側から苦情が出たことにより、皇室の西欧化が促進されたのである。一八八七年（明治二〇）の新年拝賀に皇后は洋装大礼服マント・ド・クールで臨むことになったが、日本の仕立屋では作れる者がいなかった。そのため、伊藤博文と青木は海外に発注することで話を進め、青木は妻エリザベートと在独のエリザベートの兄クラウスに協力を仰ぎ、ベルリンの裁縫師マックス・エンゲルに制作を依頼した。一〇万ドルを支出することが決められ大礼服を飾るティアラなどの宝飾品はレオンハルト&フィーゲル社に発注された。一八八六年（明治一九）、皇后の

大礼服（マント・ド・クール）とティアラなどの装飾品をドイツに注文。計一五万四千円であったが、これは欧化政策の舞台となった洋館「鹿鳴館」の総工費一八万円にも匹敵する金額だという。明治政府が国家の威信をかけ、巨費を投入したことが浮かび上がる。

このティアラの詳細については、明治二〇年二月一日の『東京日日新聞』に「皇后宮御冠」と題して次のように紹介されている。「我皇室より獨逸國伯林府（ドイツ・ベルリン）御用金工師レランハード及びフィーゲルの二氏に命じて製造せしめられたる、皇后宮の王冠を始め御装飾具の模様を仄に承はるに其代償は数万圓にして王冠はブリリヤント形の金剛石（ダイヤモンド）六〇個を以て作り奉り頂に九星あり其中心に在る一個は重さ二一カラットなるよし、但し其九星の金剛石は取外し自由にて御華簪にも遊ばさるゝ様作り参らせ 其他百四〇個の宝石を組み合わせたる御襟飾並に純金の御腕飾の如き何れも華麗莊嚴極まりなきものなりと申す」。この文中にあるように、ティアラの頂の九個のダイヤモンドは取り外し自由である。今回の令和の即位の礼でも星型ダイヤモンドを外した状態で使用された。一八八六年（明治一九）に伊藤博文、香川敬三、青木周蔵、その妻エリザベートの尽力により導入された明治の皇后の洋装と宝冠

は、皇室の伝統として現在まで受け継がれている。

おわりに

二〇二二年、日独交流一六〇年記念として東京・品川区の久米美術館で「プロイセン気質の日本人―明治の外交官・青木周蔵の横顔」展が開催された。筆者はその懇親会で周蔵とエリザベートの子孫であるニクラス・サルムライファーシャイト伯爵にお目にかかる機会を得た。サルム伯爵はオーストリア・リンツ市近郊のシュタイレック城主であり、居住する城に青木周蔵の遺品や資料を収蔵されている。遺品の大半は第二次世界大戦で失われてしまったが、一部は一人娘ハナ、その娘ヒッサ、ヒッサの娘ナタリー、ナタリーの息子・ニクラス・サルムライファーシャイト伯爵へと引き継がれて現在に至っている。ハナ達は半分ドイツ人、半分日本人として戦争中はナチス、その後連合軍からも親切に扱われなかった。その中をこれらの遺品を守り通して繋いできたのである。日本からドイツ、オーストリアへと続く深い縁に感銘を受け、青木とエリザベートの生涯と日本への貢献について知ってほしいと思ったことが小文を書くきっかけとなった。

近年、サルム伯爵の仲介で那須塩原市とリンツ市の間

で中学生の相互交流が始まり、二〇一六年には姉妹都市提携が行われた。この特別な縁による都市間交流が子供達の国際化を促し、青木とエリザベートのような国際的な人材が育つことを願っている。

参考文献

『プロイセン気質の日本人 明治の外交官・青木周蔵の横顔』 発行 久米美術館

『ドイツと日本を結ぶもの 日独修好百五十年の歴史』 発行 歴史民俗博物館振興会 編集 国立歴史民俗博物館

『青木農場と青木周蔵那須別邸』 岡田義治／磯忍 発行(有)随想舎

「皇后のティアラ 歴史脈々」 東京新聞（二〇二二・一・二〇）刊

歴史に埋れた訳は？

富田 大高 栄一

少子化対策、福祉対策、天然痘の牛痘接種、地場産業の起業参入等に、私財を投入して生涯を尽力した人物といっても、これから紹介する大高善兵衛とは江戸時代の話である。

地元民ですら語る事が出来なかった訳は、これ迄二三頁程しか活字化されておらず、その為にすべてを失ってしまったのは、松尾城を築く為に、裏山の善兵衛森の巨木を献木した為に、明治三〇年には邸宅が土中に埋没し没落した跡地は切り売りされている為である。加えて善兵衛資料はすべて大正時代の高名な本庄栄治郎博士に托されて行方知れずの有様となっている。

これ迄何人も歴史学者が我家を訪れてきたものの、沢山の伝承は伝えられていたが、話す事も気おじする程、現況からは掛け離れた話ばかりで空戻りにさせてきた。

歴史学者からは「上総の聖人」と称されても恥じない人物と慰められる程だった。

このままでは申し訳ないと縁戚に当る政財界の名家を訪ねた際、栄枯盛衰の現実を目の当たりに見せつけられたのは、福祉制度のない江戸時代には、地域の有力者が

大勢の小作人達を支援してきたからこそ村が維持出来たのであって、現在でも年金支給がなかったら高齢者は生きていけないのを見ても良くわかる筈だ。名家には活字化された記録が残されており、その中から善兵衛関係資料をコピーさせて戴いたが、故人は優れた文化人でもある事が良く分かり、名家とは一代にしては成し遂げられぬ事が実感出来た。江戸時代には同格の縁組みがなされていた為、大高総本家も豪農、山林地主、酒造業、質屋を営み、代々本を出版した程で、立派な図書室（成化堂）を有する好学風雅な文化人でもあった。

九十九里地方を訪れぬ師は、一流とはいわせぬと迄いわれた程であった。縁戚には地方代官じかたも多く、大高総本家内にも牢屋や処刑場を有し、使用人は殿様と称していた程で、長屋門前と光明寺黒門前は菅笠をとり下馬して通り過ぎたという。一二カ村の宿場を預る大惣代とされたのが二一歳で、三〇代ではすでに幼児を預り乳母を雇って赤ちゃんを養育しているのも、門前に捨て児する者がいたからである。

善兵衛は「子育ては大惣代としての天命であり、見返りや名声を求めるものではない」と主張した。避妊法のない江戸時代に於ては三千万人という静止人口が維持されているのを見ても、いかに間引きの悪習が暗黙の内に

行われていたかが見てとれる。人道主義者であった善兵衛は、里帰りの妊婦が生家に戻ると死産として届け出ているが、多くは間引きに由るものと憤慨している。それも道理で妊婦宅を訪れては、乳の出ぬ者達の子は引き取り乳母に育てさせ、経済困窮者には支援金を与える等、一人前に育てた後には親元へ帰す事を実施していたからだ。「天が授けた子宝を間引く事は、愛児の皮を剥いて着物とし、肉をそぎ取り腹を満たす事と同じ事。蛇ですら手足も乳も貯えもないのに子育てをしており、間引きは鳥獣にも劣る事」と厳しく論じたのだ。

天恵の道に背く身勝手な間引きは、村政を維持するにも支障を来し、祭り行事も事欠く有様で、田畑の荒れも恥しい程だったのである。大飢饉の年には大勢の百姓達が餓死したのは、各藩が揃って穀止めを行い、米の流通をストップさせた事によるものだった。

領主達は、年貢米が完納する迄は新米を口にする事を禁じ、未納者が出た時は五人組制度の下、お互いが相互扶助の仕来りにより、娘を吉原へ身売りさせられる程で、それが出来ぬと村八分という仕打ちを受けていた。

村の悪習として間引きが避けられないのは、畜生腹という双児と、難産による母親の死が多く、残された赤児に母親の霊魂が心残りして成仏出来ぬからと、同棺に納

め埋葬されている。全国的に行われていた間引きが、なぜ苛酷な重罪と知りつつ実施出来たかと思えば、お七夜に名付けが行われるが、それ以前のもものは霊界のものとされる所から、間引き行為は霊界に戻してやるという訳で、人間界のものではないとされ葬儀や埋葬は禁じられ、川に流した為、水子とか子戻しと称され、罪悪感を薄めていったのである。

一方領主達は、子育て支援の財力もなく、「人道にそむく重罪な間引き等、人としてやれる筈もない事」としてあつてはならない悪習対策として禁止ではなく教導に力を尽した。

はがゆいばかりのお達しに「長屋門にある乳鉾は飾りではなく乳房の象徴である」とばかりに門前に掛け札をし「困窮にして育て兼ね初生の児又は父母の内死去致しよるべなき孤児あらば我等に与ふべし厚衣を省き美食を減じ候ひて是を養育申すべき也」と発表したのである。

これに真先に反発したのが親村である富田村の名主達だ。千葉県内では旗本達の給地で占められ、多くは合給と称し、複数の旗本達の数だけ名主が存在していた為、七給の富田村は七人の名主達の合議制で村政が運営されていたからだ。いくら私財を投入しての善政とはいえ、時勢に逆らつて迄の独断専行には巻き込まれたくないのが人

情であろう。何度となく村の居酒屋で密談を謀ると、泣き所である乳母不足に付け込み、赤子を押し付け、受け付かぬと間引きする迄と強要。

解決出来ぬ程の難題が乗り越えられたのは、三年間に渡る江戸請願の折、同志として力添えしてくれた桑田立斎りゅうさいという優れた蘭医の導きである。オランダの牧畜の原書という貴重な本を与えられると、十年かけて翻訳し希望の常盤牧とこわまきを開設して「乳母いらす」と称えられているものの、当時は宗教上の戒めから、牛乳を飲むと角が生えると恐れられた程のタブーとの戦いがあった。殿様ともあろうお方が、けがれた四つ足相手にとりつかれている様は、まさに狂気の沙汰と嘆かせていた程である。

人類史上最大の死者を出した事で恐れられた天然痘も、牛痘接種の仕法で子供の命が守られる事を教えてくれたのも立斎なのだ。北海道の半分を廻り、免疫のないアイヌ達に牛痘接種を行った人であり、西洋では幼児養育の制度もある事を教えられ、善兵衛の幼児養育は日本初の快挙となっている。

牛のウミを人体に植えつけるという天然痘の接種がある一方では、幼児の命を奪っているという情けなさ、急ぎ帰郷するとすぐさま郡内の名主達を緊急招集し、吉報を知らせた所、恐ろしい患者のウミを植えると聞かされ

ては、顔青ざめ賛同者無く散会の内に終っている。

一刻を争う事だけに、善兵衛は預り子全員に種痘を実施したお陰で、一人として天然痘にかからぬ事に驚いた富田村の人々は、先を急ぐ様に善兵衛宅で種痘をしたのだが、その親子達は美しく着飾った者だけで、よそ行きの着物を持ちあわせていない者達は出向けずにとまどっていた為に、急遽医師を回村させ、一ニカ村五五〇人に無料接種を実施した。

善兵衛は富田村で実績を重ねると、個人の力では限界がある事を思い知らされ、その数値を千葉県全体に及ぶ事を願い、房総三国に比例拡大した綿密な計算による請願書を作成すると、三年の長期に渡って献策書面を提出した。

加えて福祉財源等の莫大な予算は、年貢米には頼らず、大名貸する程に財力を誇る商工業者に、現在の税金を課すような仕組で徴収し、更に幕府金融機関である御貸附所へ投資して、年一割五分という運用益を組み込み、莫大な資産見積り額を安定した基礎税源と成し、残金は予備費とし献金者に無利息で利用させる等の恩恵を与える献策をしていた。

幕府外には考えられぬ程詳細な歳入・歳出の内訳は幕府財政を預る勘定奉行所配下の関八州取締出役の人脈に

加え、その中に一人親戚の役人がいた事は見逃せない事実である。

加えて幕末は天皇の力が大きくなっていった所から、上野の寛永寺輪王寺の宮という皇族出身で幕府も一目置くという後ろ盾無くしては、どんな善行であっても、身分をわきまえぬ恐れ多い出過ぎた行為として、命がけであった事は、佐倉惣五郎の悲劇を見る迄もない程許し難い越権行為であったのだ。

善兵衛は更に幕府には負担をかける事の無い課税の事務処理を善兵衛方式により出来るという内容を献策する等、役人達に文句のつけ入る隙も与えなかった為、先送り事項とした役人は退職していった程である。

幕府は福祉関係の請願の数々は「内外共に多難な折、前例の無き事につき聞き入れ難し」と却下されたが、善兵衛は信念を曲げる事はなかった。

国力を低下させてしまった程の間引きの悪習は、米の生産を制限する昭和の減反政策が見られる現代も、潜在的記憶伝達として深層心理に刻み込まれた結果、世界的に悪名高い中絶行為が、毎年二百万件も闇の彼方に葬り去られてきたという事を思い出してもらいたい。

この他にもさまざまな先覚事業を起業しているが、現在なら高く評されない事でも、時代的背景から見れば難

事業と見てとれる。

初代県知事柴原^{やわら}和は、善兵衛方式を高く評価し、県政第一目標に掲げると「房総県第一の急務は墮胎間引きを禁ずるより先無し」と善兵衛の子育て仕法を称えた。

何故地元民の善兵衛評価が低いのかを考察して見るに、郡内有数の資産家である名家が一代にして総べてを失い、見る影もない程没落させた人を見限られても仕方ない事か。

その善兵衛を称える事は、先祖が間引いてきた過去を白日の下にさらけ出さなければならず、過去を秘匿^{ひとく}し風化させてきたのだ。

幻の義人とも称された善兵衛だが、現在大型の額縁（A I）に一代記として、筆字仕法にカット百枚を加えた作品五五面を完成させており、これをA3サイズの写真集上下版等様々な出版物の御寄贈を重ね、知名度アップに尽力下さったのが元教員の石田制覇氏である。